慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	封建制度の崩壊と維新革命に関する一異論： 猪谷善一氏著『明治維新経済史』の拙稿に対する誤解を矯す
Sub Title	
Author	山本, 勝太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1928
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.22, No.8 (1928. 8) ,p.1110(94)- 1124(108)
JaLC DOI	10.14991/001.19280801-0094
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19280801-0094

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

封建制度の崩壞と維新革命に關する一異論
猪谷善一氏著『明治維新經濟史』の拙稿に對する誤解を矯す

山本勝太郎

一

戊辰の革命起りて、新日本建設のときより、歳月茲に移りて六十有一、今再び昭和戊辰の新時代を迎へぬ。この六十年の間に、舊き日本は全然その姿を一變したり。法律に於ても、政治に於ても、倫理、道德、思想、藝術――凡ゆる方面に就て之を見るに、舊殼悉く脱じて今將に新生の日本現出せむとす。ブルジョアジーは漸く舊時代の特權階級に代りて政權を壟斷し、「大名貴族」變じて「富豪貴族」の社會を構成せり。武士と商人の經濟的背進、特權階級と貧乏士との階級的鬪爭は、今やまさにブルジョアジー對プロレタリヤの社會的鬪爭に代りぬ。遠く舊幕の封建社會にその萠芽を發したる日本資本主義は、明治維新後の「經濟革命」によりて、俄然その體形を整へ、日清日露の兩戰役を經て、茲に愈〻近世資本主義の新制度はその高度の爛熟期に向つて急速に進展するに至れり。

此の時に當り、「文明開化」の聲に醉ふて、舊套打破の一路に驀進せる歐化萬能主義の過渡期的現象はハタと行詰りたり。最早いつまでも唯々として外來思想にのみ追隨し、無條件にて飜譯的社會科學に盲從することは時代人をして自ら不能たらしむるに至れり。社會科學の研討は、單に學者机上の文字の嗜みに非して、今や實際社會生活の原理原則を樹立し、之が指揮指導の責を負擔するものとなるに至れり。文盲の曠野を開拓し、新文化を移植せる先驅者の聖き仕事は茲に一段落を告げむとす。時代は既に單なる模倣と修飾とを以て滿足せず。さらに自己內心の切實なる創造の欲求と、その不滿による寂寞と不安とを覺ゆるに至れり。これ近時漸く興れる「日本文化」の再吟味、「科學的新日本建設」の理想、從つて又「日本經濟科學」の出現に對する熱心なる時代人の仰望としてあらはれし處のものなり。

余は近時、社會、經濟學者の中にも、卒先之がために精進せらるゝの士漸く多きを見、十余年來の宿望遂せらるべきの日近けるを覺え、獨り欣躍の情に堪えず、就中、東京帝國大學に於ける土方成美氏、京都帝國大學に於ける本庄榮治郎氏を始め、東北帝大の中川善之助氏、曾て九州帝大に在り、今は塾の瀧川政次郎氏、而してさらに東京商大の猪谷善一氏等、幾多熱心なるその提唱者諸賢に對しては常に多大の敬意と感激の情とを捧ぐ。中にも猪谷氏の如きは、余が往年「鄕土經濟史」の研究を提唱し、以て「日本經濟科學」の建設を喝望したる一雜誌『經濟往來』誌上に於て、今年三月、同じく「日本經濟科學」の建設に就て熱心なる希望を述べられたれば、之をよみて私かに他日共に相携へてこの高遠の理想に向つて精進せらべき同志として語るべき日あることを期待せり。されば今その猪谷氏によつて成れる『明治維新經濟史』を披見するに當りて、余は一入の感慨と多大の

興味もて接したる次第なり。

二

然るに茲に、偶々本書を讀みゆく中、余の甚だ奇妙不可思議に感じたるものあり。そは封建制度の崩壞と明治維新の革命とに關聯して、氏が、小著『元祿時代の經濟學的研究』を批評せられたる異論なり。

はじめ余はその第三章「幕末に於ける社會階級と其鬪爭」をよみゆく中、氏が、明治維新の革命は、全く單に政治革命にして、決して產業革命に非ざりし事を力說し、而してその政治革命は、封建社會の階級的傳統的秩序に不平不滿を抱きたる「貧乏なる」下級武士の階級が、その特權階級たる上層武士階級に對する不平反抗の結果敢行せられしものなることを反復說述し、以て封建制度の崩壞過程と維新革命の直接動因との史的關係を正しく批判したるを見て個々一々の細かき點は暫らく措き、その論旨に就ては全然同感を覺えたる者なり。曰く。「斯て京都の大官たるものは、生れ乍らにして定まり有爲有能の青年公卿出づるも其家の格式低き以上青雲の志を伸ばしむる餘地がない。然も傳統的世襲者なる京部の上層部分階級は佐幕派で事勿れ主義を以て一時を糊塗する。是れ不平やる方なき不平公卿激怒の源となる。幕末社會に於て國事掛りとして攘夷即討幕黨として活躍したる青年公卿は格式なき下層部分階級の人々であつた。然も彼等の多くは所謂御藏米を受くる三十石公卿より出でたのである。」（圏點は余の特に附するところ、以下之に倣ふ）

彼等に與へられたる形式的名譽は陪臣の比ではないが其經濟的地位は一陪臣にも劣る。微祿を以て形式之美を張り、時には「先々代より受繼候借財等多分在之當今勤向其外時節に從ひ不得止次第に費用多く中世以後之振合にも難相成趣實に無恒產無恒心にて甚可歎息事共見聞有之」（三條實萬手錄）との憂言を發せしむるに至る。乍然困窮の試練は或ものをして現實批判の機會を作らしめる、竹內式部山縣大貳等浪士の尊王論に傾倒し佐幕的門閥公卿に反抗するに至る。彼等は勤王諸大名に交通して策動するが同時に陪臣浪士にも親密して倒幕運動を試みる。」（第二節、京都朝廷、三一頁）

さらに又その次の節に於て、「德川幕府は他の社會的諸制度と同樣に其自身の內に崩壞する因素即內在的要素を」有したりとせる一文は、猶余の悉く同感を表する處なり。氏は之に就きて、まづ幕府の學術奬勵就中朱子學の尊重が、却つて尊王思想の根源となれることを肯定し、而して封建制度必然の結果たる幕府の財政窮乏に就きて余と全然同一の見解を採られたり。文に曰く。「又財政的にも行詰らざるを得ない。蓋し封建社會の特色として農產物をのみ其收入源泉と考へ、然も土地に對する重課は土地生產力の疲弊、農夫の流出を免れないから一定量の收入は次第に減少する事となる。且血統連續を重視する封建思想は漁色的蓄妾制度を公認し其產物なる子女處分問題を惹起する。別家をつくり、或は大名に降嫁せしむる如きは一定收入をして愈々細分するものであらう、かくて歲入歲出の開きは貨幣改鑄による利益を以て補塡せられるを常としたが、そは物價騰貴、民心離反を惹起せねば已まぬ。（猪谷氏がかくの如きを肯定力說し乍ら、而も後に至りて、德川時代の貨幣經濟の發達に關して之を否認せらるゝが如き口吻を洩されあるは、（三七〇頁第十三行）余の私かに、氏の德川時代に於ける貨幣經濟の發達並に之が社會、經濟生活に及したる影響、ことに封建制度崩壞過程

と關聯したる因果に就て、氏の研討の甚だ吝ならざるやを疑ふ處なり。）然も子女處分は時に財政問題以上に及ぶ事稀でない。長子相續制度が封建社會の原則である事は謂ふを俟たないが、長子或は血緣近きもの必ずしも秀才として人望を博するに足らず、幾多の葛藤を演ずる事屢々である。」（第三節、江戸幕府、三三―四頁）

ことに賄賂横行の弊害（この間の事情に關する經濟的說明に就ては余は一應『三田文學』第二卷第十號誌上に於て『黄表紙私考』と題して說述したる事あり。猪谷氏はこの唯物史觀的解釋を何と見らるゝや、余はその點に就てもさらに猪谷氏の再考を求めたきなり）にも言及し、さらに旗本に關して數頁を費してその窮狀を縷述し、そを又封建制度の內在的原因によるものとして「二百五十年間一定の收入に對し、人は奢侈となり物價は高騰するから一般旗本特に下層部分階級は困窮せざるを得ない」とか、「かくて彼等大多數は不平に沈淪し貧乏に困弊し親兵たるを忘るにいたる」（三五―六頁）とせるなど、余が封建社會崩壞の過程として說ける所と何ら異る所なきを認むる次第也。而して「幕末に至つては貧窮の極、旗本たるの身分が商家の株と同樣に賣買せらるゝに至」れる事實を指摘し、その弊害の著しきを是認せり。のみならず、その後の數頁に亘りて說ける所のものは、實に貧乏士と町人との經濟的背進の事實なり。町人の金權的勢力と旗本の經濟的屈服の事例なり。而して氏はいふ。「斯くの如く幕末社會に於ける幕臣の貧窮は一般であるが、最貧窮なる微祿御家人に多數有能の士を出」せりと。而して「幕府の崩壞は幕治の下積である彼等を解放し相當の地位を考へた事に於て成功を謂ふべしとするなり。（四二―三頁）

次に氏は又、諸大名の財政的窮乏がまた封建社會崩壞の一要因たりし事を是認せり。氏は「此等大名の細別如何を問はず彼等が一樣に困窮した事も明白」なりと肯定し、而して、余と同じく、その重なる原因の一つに參覲交代制度を擧げたり。その他「各藩は轉封に依る不利、各種の上納金、造營の助功、兩山其他の火防、關門の守衛、邊警の防守に奔走せしめられ」「然も此負擔は傳統的政策の然らしむる所特に外樣大名に重課せら」れしかば、その結果「西國大名より倒幕運動を起したる必然」のものといはざる可らずといふ。（四四―五頁）

或は又いふ。「京都、江戸と相並んで幕末社會の一勢力をなした諸大名は所謂陪臣によつて圍まれる。然して明治維新に際し京都の非門閥公卿、江戸の貧乏御家人と相並んで成功したる下士は彼等の中より出でたのである。」「此他二男、三男、庶子の厄介者は上層下層より輩出して孤獨不平の徒となつた。人材上進の途を梗塞し、才能を評價しない社會は必ず騷擾の氣を作る」「幕府即藩治者の開港論に對し下士が攘夷を振翳したのは偶然ではないのである」（四七―八頁）

「元龜天正或は下つて、文祿慶長の昔に君臣死生を偕にして戰場を馳驅したる時のソリダリテイを三百五十年後の社會に索め得ない。封建的義理は次第に縮小して家祿何十石かを通してのみ現はれる事となる。然も此世襲的家祿は藩の財政難と共に屢々削除せられ祿米の半を借上げる半知の法すら次第に行はるゝに至り幕末諸藩何れも其藩士に本高を給し得ず。特に藩主が野心家で幕府の重職顯官を希望して賄賂等に御物入になる場合に屢々行はれる。藩主藩治者の此政策に對し下士の反抗が屢々幕末社會に起る。乍然斯くの如き御家騷動は餘りに現實的で義理と人情の葛藤を畫くべくも

ない。故に戯曲乃至芝居とはならないが（之れ珍論なり。余は茲に於て乎、さらに猪谷氏に江戸歌舞伎の研究、特に唯物史觀的考察をおすゝめいたしたし）寧ろ其處に明治維新の二面を傳へ得るのである。」（四九――五〇頁）

而して最後に氏は浪人を評して次の如く記せり。「當時の知識階級たる失業者が多數攘夷討幕の策源地京都に出入して時代政治に不平不滿なる月卿雲客を動かし幕府開港論をして幾度か改論動搖せしめ遂に崩壞の止むなきに至らしめたのである。然して陰然藩命を受けて策動する政治的浪人以外の浪人は其生活資料を如何にして獲得したかと謂ふに所謂寺小屋で百姓町人の子弟に教育を與へるを常としたであらう。彼等がその利益哲學を如何にして第三階級に與へたかは測量し得ないけれども、嚴格なる階級的社會に於て下士と百姓町人を融合せしめ下層武士と地主町人を浮び上らす維新の變革に或種の機能を與へた事を忘れてはならぬ」（五一――五二頁）

三

余はこゝまで讀み來りて、何となく小著『元祿時代の經濟學的研究』並に共著『歌舞伎劇の經濟史的考察』その他曾てものしたるこれらに關する拙論の數々をも一度くり返して飜き讀むが如き懷しき心地を覺えたり。而して猪谷氏の說、殆ど余の曾て說けるところの論法と相似たるを見て、氏も又われらと同じく唯物史觀の上に立ちて、封建制度崩壞の經濟的動因を主張せらるゝの士と思考せり。明治維新の革命が急激に行はれたる政治革命たりし事は夙に教科書によりて何人も之を熟和して疑はざるところ、たゞわれらは、その政治革命の遂行せられし社會狀態の解剖に當りて、その封建制度崩壞の經濟的動因を認めむとする唯物史觀の立場に於て、單純空粗なる從來の政治革命論と趣きを異にするのみ。されば余はその小著に於て、遠く所謂『元祿時代』と稱する德川氏封建制度の高潮期を中心とする前後百五十年間に亘る社會的經濟的推移を敍述するに於て、これらの間の消息を反復再四くり返して、以て封建制度崩壞の唯物論的說明を試み、「封建制度を亡したものは決して外の誰でもない。封建制度それ自身であつたのである。そして明治の維新はこの熟れ切つた柿の實をふるひ落した初冬の一時雨に過ぎないのである。和な目のつゞく限りを、吊り下つてゐた熟れ柿が、一夜の風に落つべくして落ちて行つた、それに外ならないのである。」（前揭小著三八〇――一頁）と結びたるなり。即ちいふ處、封建社會の內在的原因によりて次第に行詰りたる世紀末的現象は、當然崩壞すべき機運に際會し乍ら、猶暫らく持續し居たりしが、そが遂に『明治維新』なる史上に名高き政治的大變革によりて遂に來るべき日を迎へたりとするにあること、何人と雖も誤解せらるゝ處なかるべし。（猪谷氏又これと同斷の意見を第二十五頁の末節に於て開陳せらる）

然るに、余の甚だ怪懐の情に堪えざりしは、かくの如き余の見解と全然相同じき數十頁の說述を爲したる著者が、すぐ次節なる五十三頁に於て、「明治維新を以て町人階級による封建社會の倒壞となし、德川武斷的封建社會に於ける町人階級の壓迫にも拘らず、其手許に富が集中し封建社會倒れて資本主義社會が現出するに至つたとなす史論は余の服し得ざる所である」とて、その史論を主張する者の一人として余の前揭小著を揭げたる事なり。余はこの時、聊か奇妙變手挺なる感に打たれて、

一寸讀みつゞくるを止めて一考したるが、さてかくの如き「學者」の中にも余の史論を以て左樣に誤解せらるゝの士もあるもの哉と聊か恐縮したる次第なり。余は斯くの如き卒續誤解を恐るればこそ、近頃流行の卷末索引の如きも殊更敢て附せず、近代式讀者には甚だ迷惑ならむも全篇續了するに非んば眞意を了解し難き論法もて勝手に書き續けたるが、猪谷氏の如き仁よりこの種の誤解を聞くに至りては少しく心外の事に覺えたり。（余が小著の同處直前に於て記したる町人社會に富の集中したる事實に就ては氏も同意見なるを見たり。而して余は氏の誤解する如く、この町人の富が直接自ら封建幕府を倒壞し以て明治維新の革命の立役者となりしなどゝ述べし事さらになし）一體猪谷氏は、明治維新の革命を以て下層貧乏士の政治的變革とすることを以て自家獨創の新說の如く思惟せらるゝ樣に見うけらるゝが、余は之に就て第一に不思議に思ふ處なり。余は小學校を東京にて了え、中學校も又東京に於て終えたる者なるが、われらがそれらに於て學びたる國定教科書又は檢定教科書の類は、一切悉く皆われらに教ふるに明治維新を以て「政治上の大變革」なりと說き、曾て一も之を以て「經濟革命」なりと教へしものなし。されば余の如きは、久しく明治維新を以て政治革命なりと の單純なる東京式教育の結果を鵜呑みにし來りしが、偶々日本經濟史の研究に當りて、實はその「政治革命」の敢行せられし根柢には、實に封建社會崩壞の必然的命數の存在せる事實を認むるに至りしものにして、その說明は小著に於て、その他の拙稿に於て企てたる、前掲猪谷氏の說と全く軌を一にせるところのものなり。たゞ余はその小著に於ては、專ら所謂『元祿時代』を研究したるものにして、未だ以て『幕末維新』の唯物史觀を論證したる者に非れば、小著に於て明治維新に言及したる點はまことに一片の文辭のみ。而も猪谷氏にありては、この一片の文辭をさらに卒解して、折角余の說くところを誤り記されたるは、余のためにも、氏のためにも甚だ遺憾を表さざるを得ず。乞ふ、希くば再び小著を改めて、全篇序を追ふて熟讀吟味せられ、以て余が說くところの眞意を理解せられよ。

四

余は茲に至りてふと一つの舊事を想起せり。そはたしか大正十五年の早春の頃の事なりき。余偶々旅に出でゝ、途次一日名古屋なる同窓の友を訪れし事あり。志貴氏といふ隱れたるクロポトキン研究の篤學の士なり。その時、志貴氏によりて余に示されたるは同地に於て刊行せらるゝ『新愛知』と稱する一地方新聞なりき。そこに小著に對する尾池なにがし氏（甚だ失禮なれどもその名をハッキリと覺え居らず）の批評の一文を見たるなり。それは極めて長文なる且懇切なるものなりき。余はその日行旅の人、固より今日その文章をくり返して暗んずる事叶はざるも、最初の一段略七八十行に亘りては縷々として稱讃の辭を以てし、「曾てカーライルが經濟學を以て最も暗き陰鬱なる學問なりといへるに、今はじめて經濟學も亦明き學問となるに至れり」といふ意味の途方もなき文辭を以て當時の年少者を驚かしたるが、いよ〳〵第二段に入るや、さてとして、以下滔々と三個の點に就きて異論を掲げられたるを見たる記憶あり。而してその三個の異論の一つが實にこの猪谷氏式の批評なりき。即ち尾池氏の批評に從へば、余の封建制度崩壞論は、一體革命進化說に從ふものなりや、革命突變說に從ふものなるや分明せず、從つて果して封建制度の崩壞に對して確固たる所見あるや否や疑しといふ意味のものなり。

當時余は、余の小著に對して各處にこの種の卒讀と誤解とを致すの人あらむことを危みゐたれば、その曲解に對しても敢て答ふる必要を認めずと思惟し、爾來今日に至るまでそのまゝに過し來りしが、今猪谷氏の同じ卒讀に遭ひて、事に序して聊か想起したるにより併せ記して對照の便にいたしたしと思ふに至りしなり。

余を以てすれば、革命は突變説とか進化説とかと一定の型に入れて論ずべきものに非ずと思考す。革命のみならず、この複雜なる社會現象を單に一片の法理法則の下に説明せむとし、或は一つの型に挿入して之を敍述せむとすることは全然不可能なり。社會は飴ン棒には非るなり。時に進化して成れる漸進的革命もあるべし。又時には全然無計劃なる突發事件よりして大革命を誘發したる事もあるべし。而も大方は進化の段階を踏みたる革命の機運ありて、之が何らかの衝動によりて突發的に遂行せらるゝもの〻如し。明治維新の如きはその一好例にして、全くこの兩説の併用されたるものといふべく、突變説のみを以てしては矛盾あり、そは明治維新の革命を飴ン棒扱にすると異らず、されど進化説とするには、之亦猪谷氏も力説さるゝ如く不相應のものとなるべし。されば余はこの際兩説を採用して、革命の機運は封建社會の爛熟頽廢そのものゝ中に釀成せられたりと。されど之を振ひ落したるは全く別個外來の風力のみ。而もその風力は、その時、その場所に突如として發現したるものなり、との意味を述べたるなり。余は猪谷氏に對して辯解すると同時に、尾池氏に對してもこの説明を送呈して余の説けるところの眞意を了解せられむことを欲する者なり。

五

かくの如くして、余は遂に、猪谷氏が異論なりと指摘せられたる處の、封建制度の崩壞と維新革命とに關する余の所説と、猪谷氏の論法とは、その實聊かも異るところなき同種のものなることを發見したるなり。明治維新の直接動因を急變的政治的要素に求め、而もその「政治革命」を誘導したる機運を封建社會の自然的崩壞過程の間接的動因に説明せむとすることに於てわれらが唯物史觀と同一の立場に立てり。氏が「服するとは出來ぬ」と述べられし處の所説は、豈圖らんや、氏が自ら滔々説述せるところの見解そのものなりき。されば氏もその「異論」を稱へられたるあと、直ちに「任意に非して强制が支配し、合理に非ずして無理の横行する社會は第三階級の營利的活動に障害が多い。大都會の巨商が幕府諸大名に含む所は下層武士階級の感情と一脈の相通ずる所があつたのである。故に戊辰戰役に際し封建的資本主義(?)が官軍の爲に流通せられ討幕に便宜を與へたのは必ずしも偶然ではない」(五六頁)と平氣で述べられしなり。たゞこれに對しては、さらに申譯的説明を加へられたるが、之は百姓一揆と維新革命に關する氏の速斷と共にさらに深重に十分吟味せらるべき處と信ず。氏が明治維新の「政治革命」を説く事急にして、余りに他の動因を見ることを嫌惡するの態度をとられしは、氏のいふところの史實に忠實なるべしとの持論を却つて自ら破棄せらるゝ如く見ゆ。かくしてそは又畢に氏の所説を驅つて「自家撞着の辯」に陷らしむるに至りしなり。

この事は、特に第四章以下の諸論に於て次第に濃厚となるを見るべし。殊にこれより、何故か明治維新を以て「政治革命」の一點のみに固執せむとしたる氏の所説それ自體内に於ける矛盾の結果は、却つて、わが國に於ては、今日との「富豪貴族」のブルジョア經濟爛熟の時代を見るに於ても、猶

且ブルジョア革命の行はれざる事を主張するに至るが如き、その著しきものゝ一例なり。余は氏がさらにひろき方面より、より多くの資料を蒐めて、もつと社會の眞相にふれたる、もつと鋭利なる剖刀を以て實際社會を解剖批判したる所說を發表せられむことを切望する者なり。氏は折角從來の空粗なる維新の政治革命論に對して、その誘因を下層貧乏武士の反抗てふ、唯物史觀的封建制度崩壞過程の說明を試みて新說に成功し乍ら、而も他人の所說を卒讀曲解して之を批難し、讀む者をして果して一體どつちを主張せむとするものやら一寸迷はざるを得ざらしむるが如きは、特に余の如く直接迷惑を蒙りたる者にありては余り感心したることとは思へざるなり。

六

最後に余は、氏がその附錄二六七頁以下に於て「日本に於ける貨幣經濟の發達」なる題下に瀧澤マツヨ女史がコロンビア大學に於けるドクトル論文として提出したる二篇の批評に對して聊か批評を以て一言せむとするものなり。何となれば、そこに又余の小著が引合に出され居るのみならず、さらに氏の日本經濟史研究の態度に就きて余の聊か所見を異にするところあればなり。

氏のこの批評の一文を見るときは、瀧澤氏の論文は、殆ど余が曾て企てたるものと同樣なる論法にて、而して之はその結論を、それよりして（氏に從へば）氏と全然反對に政治革命に非ずして全く經濟的事情に基くものなりと斷定せるものゝ如し。余は未だ該論文を見るの機會に接せざれば、瀧澤氏の說に對する猪谷氏の批評に就ては一言も述ぶる事叶はず、されど氏が瀧澤氏が、瀧本博士編纂の『日本經濟叢書』に盲從したりとて非難したるついでに、余に對しても又同樣の非難を浴せたるは聊か閉口したる次第なり。然らば直ちに猪谷氏に向けて反問せむ。氏は余が採りたる他の幾多の資料――特に氏に於ては恐らく未見の地たらむそれら余が自ら據る處の「新經濟史觀」の上に於ける諸資料に就ては如何なる判斷批評を下さむとするや。その吟味、引用、檢討に就て氏は如何なる信念ありや。余は之に關して氏の明答を得むと欲す。余は余の所說に獨斷の點尠からずとせる氏の批難に就ては、却つて滿足の意を以て接したり。何となれば、余は從來の研究方法と、從來の所說に慊らざるを以て自ら研究に精進するものなれば、事毎に獨自獨斷の所論を開陳すべし。これ余の學徒としての唯一の生命にして、且余それ自身なり。而して之に對して先考同學の諸氏諸種の批評敎正を垂れらるべし。余は最も之を感謝するものなり。たゞそは學徒としての眞摯なる態度にてありたきものなり。一々條理を以て反駁說述せられたきものなり。空莫たる批難に對しては余は答ふるに術なし。余が猪谷氏の批難に對して反問する所以即ち之のみ。

たゞにそれのみならず、二七〇頁に於ける氏が「貨幣經濟」「近代都市」なる概念に關する說述の一端は、前揭諸種の「自家撞着」の點と共に、余をして氏は明治維新經濟史以外、德川時代經濟史及び明治年間に於ける日本金權發達史等に就て果して幾許の研究を經たるやを疑はしむるに至れり。氏は二個所に於て『日本經濟叢書』につきて敬虔ならざる態度を以てせられたるが、併し氏は農民の生活狀態につきて同叢書全體を通讀せられたるや、又同書に就て士農工商に關する舊時代の諸家の意見を一應は吟味せられたるや、さらに德川時代に於ける諸家の思想、並にその說述を十分に吟味熟讀せられたるや。然らば氏の所說は今少し條理一貫したる唯物史觀の上に歸着することならむ。余は常

に謂ふ。經濟史の研究に當りて、その一時代のみをかけ離して論ずることは不可なり。その一方面のみを見て之が全象を斷定することは不可なり。物には萬事表と裏とあり。脈々たる進化の連鎖を辿ることなくして叙述せられたる史論の如きは畢竟一篇の蒐集錄のみ。表より裏より縱横に之を吟味解剖し、その眞正の史實の上に立脚し、自家の僻見を交へざるの態度を以てせざれば、終極に至るまで眞正の經濟史は描く事能はず。德川時代に於ける人口の增加移動と近代的都市の形成、奢侈經濟の發展、貨幣經濟の發達、而して商業資本主義の發生發達並に之に關聯して「封建的富」より「市民的富」への移動――從つてブルジョア經濟の發達等、この間の事情を十分に吟味研討したる後に非れば、實は封建制度の崩壞と明治維新の「政治革命」並にそれに隨伴して行はれたる「經濟革命」及び近代日本資本主義の發展に關する眞髓を把握することは到底覺束なき事なり。

ヘンリー・チャールズ・ケリイの地代學說

內田勇二

一

自然又は自然を通じて働く神を以て、價値の唯一の源泉と做すの思想は、經濟學の中に其根を下ろす事淺からざるものがある。そはフイジオクラアトを通じて經濟學祖アダム・スミスにすら影響し、次でトオマス・ロバアト・マルサスに依つて繼承せられて居る。而して此の思想の具體的なる一表現は、彼等の地代天惠說に於て最も良く見出さるるものである。(一)

フイジオクラアトは、富を生產するものは農業勞働のみ、從つて農業階級のみが其余剩を以て爾餘の諸階級を維持すると說き、スミスは、農業に於ては自然が人と共に勞働すと做し、而してマルサスは、地代を以て、土地が之を耕作するに要する人數以上の人口を維持し得ると云ふ天與の性質を有する事の、明白なる表示に外ならずと思惟したのである。(二)彼等に從へば、地主階級と雖も不生產的乃至社會上不必要なるものには非ずして、却つて彼等は經濟上及び社會上高位の階級に屬するものである。地主階級は單に政治的に有意義なるのみならず、又最初に土地を占有し、之れを開